

第1章 イギリス・ジェネラルバプテスト（1660年まで） （続き）

ジョン・スマイス、トマス・ヘルウィスと最初のジェネラル・バプテストたち

「新約聖書が教える『見える教会』とは、福音書の主要で、かつ根本的な部分から導き出された、神の命令するすべての教会の儀式を行う教会のことではないのか？」。この修辞疑問を出したのは、ジョン・スマイス（John Smyth, 1570?—1612）だった。それ以後、この問いはバプテストの根本的な関心となっていった。その関心とは、地上においてキリストの「見える教会」を正しく建て上げることである。スマイスをはじめ、トマス・ヘルウィスとその仲間たちが、1608年のある時期にアムステルダムへ脱出した時、全員は間違いなく、自らの選いで分離派の教会員となった者たちで、共有する神学の枠組みとしては、確かにカルヴィン主義神学を固く信じていた。

おそらく、彼らがキリストのバプテスマは信仰者のみに授けられるべきであるとの確信に至った背景には、次の3つの要素があったはずである。第一に、長い間、ほとんどの分離派が痛みとしていた自らのバプテスマである。彼らが受けたバプテスマは、彼らがキリストの教えに背いているとみなしていたイングランド国教会によるものであった。第二に、見える教会を再建したいという絶えざる願望から始められた聖書研究が続けられていた。彼らにとって「再建される見える教会」とは、彼らの信じる使徒的理想に最も近いものであった。第三に、アムステルダムのメノナイト派が行っていた信仰者のバプテスマの存在である。バプテスマに関する彼らの痛みは先鋭な問いとなったに相違なく、聖書研究とメノナイト派との知遇は、その問いに応え得る十分な回答となったと思われる。

しかし当時、スマイスは、メノナイト派が他の教義的な問題に関して誤っていると信じていたため、メノナイト教会でのバプテスマは望まなかった。その結果、後にジョン・ロビンソン（John Robinson）が述べたように、「スマイス氏は自分自身にバプテスマを受け、次にヘルウィス氏、そして残りの者達にバプテスマを授けた」のだった。記憶すべきことは、このバプテスマが浸礼ではなく「洗礼盤」のバプテスマ、つまり恐らくは、その初めの頃、分離派が自分の子供たちにバプテスマを授ける形式であった「水で顔を洗う」仕方で行われたのであろう¹。

ジョン・スマイスは、いかにして自身が、後年オランダの穏健なカルヴィン主義者ジェイコブ・アルミニウス（Jacobus Arminius）の名で表現されるようになった見解と同じ考え方を持つようになったかについては、一切書き残していない。もしかすると、スマイスは、その数年前にケンブリッジでピーター・バロ（Peter Baro）が論じた、多少の共通点を見出せる見解をじっくりと考えたのかもしれない。確かに、メノナイト派は学門的色彩の強いカルヴィン主義を強く批判していた。それ以上にはつきりしているのは、神学的関心のある人々は皆、当時オランダ国内で起こっていた神学論争を無視で

¹ John Robinson, *Of Religious Communion*, Lyden, 1614, 48.

きなかったばかりか、恐らく、どちらの側につくかという選択を迫られているという思い抜きに、その論争に関心を持つこともできなかったであろう。

選びと遺棄に関するカルヴィン主義の見解については、それが幼児洗礼にではなく、信仰者のバプテスマをその基礎を据える教会にぴったりすると強く考える人もいたであろうが、スマイスには、「アルミニウス」主義の方が、信仰者のバプテスマを受けた個々人に課せられた責任によりよく共鳴するように思えたはずである。いずれにせよ、スマイスの分離派の論敵のひとりであるリチャード・クリフトン（Richard Clifton）は、スマイスが次の2つの立場を主張する文書を配布していると、強く述べた。その2つの立場とは、「1. キリストの贖いは万人に及んだ。2. 人間は、示された良きことは何であれ、自ら進んで選び取る能力を保持している。」というものであった²。時間の経過と共に深められ、その過程で修正が施されはしたものの、その見解は、歴史的には「普遍（General）」バプテストと呼ばれ、その呼称が定着するようになった。彼らが、キリストの死はすべての人間のためであったとする万人の贖罪を信じていたからである。

スマイスは、大胆にも、自分自身にバプテスマを施し、正統なカルヴィン主義とは対照的に振る舞った。しかし、その後、アナバプテスト派と親しく交わるようになると、アナバプテストは異端ではないという思いに至り、自分たちがアナバプテストによるバプテスマの可能性を退けたのは正しくなかったと考えるようになった。彼はそれまでは、バプテスマに関する使徒的信仰とその実践の継承がキリスト者たちによってまったく曲げられ、失われたとの仮説に立って行動していた。そのため、彼は「良心を持ってバプテスマを受けることができる教会はどこにも存在しない」と考えていた³。

この意見の相違は教会に分裂を引き起こし、スマイスとその教会の多数派がメノナイト派と親密な交わりを求めるようになったため、ヘルウィスと少数の同心の者たちは教会から距離をとるようになり、メノナイト派の人々には、自分たちにはその交わりが必要ないと強く警告する手紙を送る有様であった。ヘルウィスたちは、バプテスマ執行の継承については、「バプテスマのヨハネはバプテスマを受けてはいなかったが、悔い改めのバプテスマを説教し、信仰と罪の告白をした者たちにバプテスマを授けた。今日、同じ聖霊によって促された者は誰でもそれと同じ言葉を説教し、バプテスマのヨハネに倣って、回心に導かれた者たちに水による洗いを授けるであろう。誰がこれを禁じ得ようか？」⁴これに対してスマイスは、そのような無秩序なやり方は「世のいかなる教会とも相いれず、誰もそれを支持しない。つまりは、教会における愛の絆と兄弟愛を破壊するものである。」とコメントした。

最終的には、ジョン・スマイスは1612年に肺炎で亡くなりはしたものの、1615年1月には、スマイスに追従した多くの者たちがメノナイト派に合流するに至った。そうする中、トマス・ヘルウィスと彼の同心の小さな群れは、1612年に『信仰の表明（*A Declaration of Faith*）』を書き上げた。これは「神は万人を救われた」と主張し、正統カルヴィン主義とは反対の立場を表明した。加えて、彼らの教会論的確信のアウトラインをも記した。これらの主張は、後のジェネラル・バプテストの信仰告

² Richard Clifton, *A Plea for Infants*, Amsterdam, 1610, 'An answer to Mr. Smyth's Epistle to the Reader'.

³ John Smyth, *Works*, II (ed. Whitley), Cambridge, 1950, 757.

⁴ Champlin Burrage, *op. cit.*, II, 185.

白で忠実に受け継がれており、それらは、彼ら自身が生い育った分離派の伝統を色濃く落とすものであったと推測される。

ヘルウィスと彼の仲間たちは、「キリストの教会は信仰者の集まりであり・・・神の言葉と霊によって世から分かれたれ・・・自らの信仰と・・・罪の告白に基づくバプテスマによって主と結ばれ、相互に結ばれた（者たちの交わり：訳者加筆）」と信じていた。キリストの教会では皆一つであり、その教会は「様々な信仰者によって」構成され、聖書によって導かれたこれらの人々は皆、唯一キリストだけに直接の責任を負っていると主張した。また、このような信仰者が構成する教会は、たとえ教会役員（牧師を指す：訳者）が不在であっても欠けない十全な教会であるため、投獄や病い、またその他の理由で教会に役員がいない時でも、教会員は「互いに集まる時、祈り、預言を行い（み言葉の解き明かし：訳者）、パン裂き（主の晩餐：訳者）や、すべての聖なる神の命令を行うべき」ことも併せて強調した。教会としての極めて強い独立性と自主性を表明するこの声明は、迫害下にあった先駆者の厳しい状況を十分すぎる程に映し出している。しかし、これらの見解は、ジェネラル・バプテストの数が増えていくに従って徐々に緩和され、修正された。

とはいえ、これには教会の重要な事柄について、多くのことが記されている。教会の転入会には、必ずバプテスマが要求され、教会員なって受け入れられるべきであると信じていた。そのバプテスマは「水の洗い・・・罪に死んだことを外的に表す行為である・・・そのため、当然ながら嬰兒（幼児）には該当しない」と信じていた。いかなる教会も、教会員たちが「互いをよく知り合うことができない」ほどの大きな群れになるべきでなく、「教会員は、互いの魂と体の事柄の両方について、あらゆる愛の務めを行う」べきであると信じていた。主の晩餐は「キリストを信ずる者たちの霊の交わりを外的に表す行為」であるため、罪を犯し、悔い改めない会員には陪餐を停止すべきであるが、「市民生活に関しては」変わることなく交わりを持ち続けるべきであると信じた。同時に、教会は毎週の主の日には、「祈りを行い、預言を行い、神を賛美し、パン裂きと神の礼拝のためのあらゆる霊的な交わりを行う」ために集まるべきであると信じた。そのため、教会員はその日には、社会における自らの仕事をすべきではないとした。

各教会は2種類の役員の任命を求められた。それは、「専ら魂に関係する事柄について会員を養う」長老（elders：牧師、牧会者を指す）と「貧しい者たちと、体の事柄について力のない者たち（病床にある者：訳者）を助ける男性と女性」の執事である。これら役員は、「自らが会員であるところの教会の会衆」によって選ばれるべきであり、それ以外のいかなる外部からの権威によって選ばれるべきではない。ヘルウィスと仲間たちは、メノナイトとは異なり、政府は「神の聖なる定め」であるばかりか、行政長官は「キリストの教会の会員となることが可能であり」、「衝突のための解決手段として、主の名による宣誓をすることは、正当な理由がある場合、許される」と信じた⁵。

以上のことは、トマス・ヘルウィスがイングランドに戻る際に同行したグループの確信であった。一行は、1612年にはイングランドに戻ったのは明らかで、その後、国内で『不法の奥義に関する簡

⁵ Lumpkin, 116-23.

潔なる言明』(A Short Declaration of the Mystery of Iniquity) を出版した。それには、彼らバプテストを超えてそれ以外の人々にまで及ぶ、すなわち万人の信教の自由を求める訴状が国王ジェームズ1世に宛てられていた。巻末には、ヘルウィス自身の確信に加え、迫害を甘受するのはキリスト者の務めであるとも説いている。彼とその友らは、帰国後に待ち受けている苦難をはっきりと認識していたため、「キリストとキリストの真理のために、自分たちの命を母国に埋める」覚悟であったとも記されている。

1616年頃にヘルウィスは死去し、その後の25年間、残された同心の者達は辛うじて迫害を切り抜け、国内で非合法活動を行っていた。彼らのことは、アムステルダムのメノナイト派の古文書館に所蔵されている断片的な書簡群と、彼ら自身の手による非合法の出版物によって知り得るのみである。

ヘルウィスの死後、ロンドンの教会は、彼と共にオランダから帰国したジョン・マートン (John Murton) によって牧会されていたようである。1615年、彼らは『誰も迫害されるべきではないということ・・・対話を通して論破する (Objections argued by way of dialogue . . . that no man ought to be persecuted)』を出版したが、それは国の政策を緩めるほどの目立った効果はもたらさなかった。別の書物である『神が予定されたことに関する記述 (A description of what God hath predestinated)』(1620年)には、彼らが奉じていたアルミニウス主義の見解が述べられた。つまり、バプテスマは真実の教会の会員としての信仰に基づくべきであり、賜物を与えられている「弟子はみな」、牧師と同じように説教をし、人々を回心へと導き、バプテスマを授けるように命じられているという見解に立っていた。

100年以上も前、ベンジャミン・エヴァンズ (Benjamin Evans) はアムステルダムのメノナイト派古文書館で見つけた何通かの手紙を英語に翻訳し、出版した。それには、極めて僅かではあるが、1620年代のイギリス・ジェネラルバプテストの様子が記されている。

これらの書簡の中の古いものには、ロンドンの教会で起こった分裂についての記録がある。この分裂は明らかに、ジョン・マートンがまだ存命だった1624年の春に起こったもので、その時にエライアス・トゥーキー (Elias Tookey) と彼に共鳴する15名の会員が教会から分離した。その理由は、マートンとその教会の多数派が、極端な厳しさを以って、あるキリスト論的断定を主張して止まなかったからである。トゥーキーと仲間たちは、官憲から求められた時には宣誓することを辞さず、キリスト者であっても「正義の戦争 (Just war)」を戦う準備をすべきであると考えていたようである。彼らは、和解に向けてアムステルダムから援助を得る道を模索していたが、その結末は不明である。

1626年の一通の手紙は、ロンドンの主要な教会と、その教会と交わりのあったロンドン、サラム、コヴェントリ、ティヴァートンにあった教会が、宣誓の正当性と教会員が行政長官となることができるかについて、メノナイト教会と見解の相違があったことを明らかにしている。たとえ互いに「同じ主イエス・キリストを愛し、あらゆることにおいて一致を打ち立てるキリストの真理を愛し、同じ仲間としてすべての人々と親しく歩む者たちになるとしても」、結局のところ、自分たちは、アムステルダムの兄弟たちとは同じではないことはよく解っていた。彼らがこの手紙を書いた時、トゥーキーのグループは教会から分離したままで、かの5つの会衆は集まって大きな教会を作り、全教会員数は約

150人となっていた。そこには正式に選任された牧師がいなかったため、説教者として認められた人々が礼典を行っていたようである。しかしながら、そのようにして認められた説教者が複数いた訳ではなかったため、彼らが望んだように、毎週、主の晩餐式を行うことはできなかった。1630年、更にもう一通の手紙がアムステルダムからロンドンに送られて来たが、それには、国家との関係について見解が異なるために、メノナイトとの合併は不可能であることがはっきり書かれていた⁶。

ジェネラル・バプテストのロンドンの教会が、1630年代という困難な時代を通じて生き残ったという確かな証拠はないものの、1640年代のベル・アレイ（Bell Alley）の教会は、トマス・ヘルウィスと共に帰国した仲間のその直系によるものであると信じることは可能であると思われる。1630年代にはその他の複数の地下教会が存在していたが、これらの教会に関する証拠が見つからないのは、それが消滅したからではなく、官憲の手を逃れることに成功したからであろう。

（続く）

⁶ B. Evans, *Early English Baptists*, 2 vols, 1864, II, 21-44. Cf. Champlin Burrage, *op.cit.*, II, 222-257.